

随 想

講義あれこれ

佐々木 教祐

私はこの4月から名古屋大学の情報文化学部に移り、新設の医学部保健学科の1年生約200名に化学の講義をすることになった。勿論、私は化学の先生として医療短大の学生に17年もの間毎年講義をしてきたのだが、今回のように200名という学生を1度に教えるのは初めての経験である。毎年4月が近づくたびに講義のやり方や教材の使い方などあれこれ考え思い悩むのだが、講演ならいざ知らず選択科目とはいえ基礎教科である化学を200人の学生に教えるのはどうしたらよいか、今までになかった難問であった。講義室は共通教育棟の中でも2番目に大きな部屋が割り当てられ、ビデオ、パソコンなどが映せる大きなスクリーンがあり、視聴覚教育の設備は整っている206名収容の大きな教室である。しかし、学生が全員出席すると壮観というか窮屈で息苦しくなる狭さである。小学校ではゆとりを持った教育が叫ばれているのに、大学ではどうして椅子や空間にゆとりを持たせた講義室の設計ができないものかとも思うのだが、こんな部屋で黒板に字を書いて読ませるには20センチ位の大きさに書かなければならないのであきらめた。そこで思いついたのが、今インターネットでよく使われているWWWのホームページ形式により、文字、図、動画などを使って自分の教科書をコンピュータの中に作ることである。この教科書をスクリーンに映しながら講義を進めれば、字も図も拡大して学生に見せることができるし、スライドと黒板の機能を同時にスクリーンの上でやっってしまうことができる。これなら20センチの文字も教科書にない絵も、部分的な拡大図も、タンパク質のような複雑な分子を動画を使ってあらゆる方向から学生に見せて説明することができる。文字の大きさもレイアウトの変更も簡単である。説明している位置を示すポインタは、パソコンのカーソルで代用できる。これだと言うことで「健康文化」のホームページを作る要領で資料を作り、第1回目の講義「化学とは何をする学問か」をこの方式で行ってみた。まず文字が読みにくいと注文が来た。そこで使用する文字は、1画面に5行位しか入らないような大きな文字とそれより少し小さい字の2種類だけにし、文字に色を付けることで対応した。説明しながら画面を動かして行くと「もう少しゆっく

りと画面を動かして下さい。写せません！」と悲鳴に似た声が挙がったりした。3回目頃からは学生も先生も慣れてきて、薄くて見えにくい時は学生の方からカーテンを閉めましょうかと言ってくれるし、私の方は画面の移動を少しゆっくりにした。5回目くらいになると学生の方から「講義に使っている画面をインターネットで見られないでしょうか」との質問もくるようになった。ノートを取るのが大変なのでホームページをプリントしようと言うことらしい。学生さんも自分でいろいろなホームページを見ることができるようになり、講義のスクリーンに映される画面がWWWのページと同じであることに気づいたらしい。学生との駆け引きは今後も続くだろう。

今の学生は緊張が長く続かないらしく、講義をしていると5分もたたない内におしゃべりを始める。第4回目の講義には学生の教科書に書いてない「放射化学」についてスクリーンを使って講義をした。するといつもよりおしゃべりが減り、必死にノートを録っている。昔の先生の講義のやり方、とくに文化系に多いと聞いているが、「先生が自分のノートを読み、学生がそれを写す」、又は「先生は黙々と板書し、学生がそれを写す」と言うやり方があった。このやり方は、私は旧式な方法だと思っていたが、今回の経験から多人数教育においてはかなり有効なのかも知れないと思うようになった。

やさしく教えれば、少し知っている学生はその学問を何でも知ってしまった(?)と錯覚して馬鹿にするし、少し複雑なことを言うと分からないと苦情をいう。その配分が教育のノウハウと言うことかも知れない。教育とは何年やってもこれでよいということにはならないし、手を抜いたように見えるやり方が必ずしも悪いとはいえない。教育とは何年やっても難しいものである。

(名古屋大学情報文化学部教授)